

中国怪奇小説集

輟耕録

岡本綺堂

青空文庫

第十一の男は語る。

「明代みんげんも元げんの後を亨うけて、小説戯曲類は盛んに出て居ります。小説では西遊記さいゆうき、金瓶梅きんぺいばいのたぐいは、どなたもよく御承知でございます。ほかにもそういう種類のものはたくさんありますが、わたくしは今晚の御趣意によりまして、陶宗儀とうそうぎの『輟耕録』を採ることにいたしました。陶宗儀は天台の人で、元の末期に乱を避けて華亭かていにかくれ、明朝になってから徴めされても出でず、あるいは諸生に教授し、あるいは自ら耕して世を送りました。元来著述を好む人で、田畑へ耕作に出るときにも必ず筆や硯をたずさえて行つて、暇があれば樹の下へ行つて記録していたそうです。こ

の書に輟耕の名があるのはそれがためでしょう。原名は『南村輟耕録』というのだそうですが、普通には単に『輟耕録』として伝わって居ります。この書は日本にも早く渡来したと見えまして、かの、『飛雲渡』や、『陰徳延寿』の話などは落語の材料にもなり、その他の話も江戸時代の小説類に翻案されているのがありまして、搜神記や酉陽雜俎に次いで、われわれ日本人にはお馴染みの深い作物でございます」

飛雲渡

飛雲渡は浪や風がおだやかでなくて、ややもすれば渡船の顛ひうんど
てんぷ

覆くするところである。ここに一人の青年があつて、いわゆる放ほう縦じゆうふき不羈ふきの生活を送っていたが、ある時その生年月日をもつて易者に占つてもらふと、あなたの寿命は三十を越えないと教えられた。

彼もさすがにそれを気に病んで、その後幾人の易者に見てもらつたが、その占いはほとんど皆一樣であつたので、彼もしよせん短い命とあきらめて、妻を娶めとらず、商売をも努めず、家財をなげうつて専ら義侠的の仕事に没頭していると、ある日のことである。彼がかの飛雲渡の渡し場付近を通りかかると、ひとりの若い女が泣きながらそこらをさまよつていて、やがて水に飛び込もうとしたのを見たので、彼はすぐに抱きとめた。

「お前さんはなぜ命を粗末にするのだ」

「わたくしは或る家に女中奉公をしている者でございます」と、女は答えた。「主人の家に婚礼うちがありまして、親類から珠たまの耳環みみわを借りました。この耳環は銀三十錠の値いのある品だそうでございます。今日それを返して来るように言い付けられました、わたくしがその使いにまいる途中で、どこへか落してしまいましたので……。今さら主人の家へも帰られず、いつそ死のうと覚悟をきめました」

青年はここへ来る途中で、それと同じような品を拾ったのであった。そこでだんだんに訊いてみると確かにそれに相違ないと判ったが、先刻から余ほどの時間が過ぎているので、その帰りの遅

いのを怪しまれては悪いと思つて、彼はその女を主人の家へ連れて行つて、委細のわけを話して引き渡した。主人は謝礼をしようといたが、彼は断わつて歸つた。

それから一年ほどの後、彼は二十八人の道連れと一緒に再びこの渡し場へ来かかると、途中で一人の女に出逢つた。女はかの耳環を落した奉公人で、その失策から主人の機嫌を損じて、とうとう暇を出されて、ある髪結床へ嫁にやられた。その店は渡し場のすぐ近所にあるので、女は先年のお礼を申し上げたいから、ともかくも自分の家へちよつと立ち寄つてくれと、無理にすすめて彼を連れて行つた。夫もかねてその話を聞いているので、女房の命の親であると尊敬して、是非とも午^{ひるめし}飯を食つて行つてくれと頼

むので、彼はよんどころなくそこに居残ることになって、他の一行は舟に乗り込んだ。

残された彼は幸いであつた。他の二十七人を乗せた舟がこの渡し場を出ると間もなく、俄かに波風があらくなつたので、舟はたちまち顛覆して、一人も余さずに魚腹に葬られてしまつた。

青年は不思議に命を全うしたばかりでなく、三十を越えても死なないで、無事に天寿を保つた。この渡しは今でも温州の瑞安うんずいあんにある。

女の知恵

姚 忠 肅は元の至元二十年に遼東の按察使となつた。

その当時、武平ぶへい県の農民劉義りゆうぎという者が官に訴え出た。自分の嫂あによめが奸夫と共謀して、兄の劉成せいを殺したというのである。県の尹いんを勤める丁ていきん欽きんがそれを吟味すると、前後の事情から判断して、劉の訴えは本当であるらしい。しかも死人のからだにはなんの疵きずのあとに残っていないのである。さりとて、毒殺したような形跡も見られないので、丁もその処分に困つて頻りに苦勞しているのを、妻の韓氏かんしが見かねて訊いた。

「あなたは一体どんな事件で、そんなに心配しておいでなさるのです」

丁がその一件を詳しく説明すると、韓氏は考えながら言った。

「もしその嫂が夫を殺したものとすれば、念のために死骸の脳天をあらためて御覧なさい。釘が打ち込んでいるかも知れません」

成程と気がついて、丁はその死骸をふたたび檢視すると、果たして髪の毛のあいだに太い釘を打ち込んで、その跡を塗り消してあるのを発見した。それで犯人は一も二もなく恐れ入って、裁判はすぐに落^{らくちやく}着^{ちやく}したので、丁はそれを上官の姚忠肅に報告すると、姚も亦^{また}すこし考えていた。

「お前の妻はなかなか偉いな。初婚でお前のところへ縁付いて来たのか」

「いえ、再婚でございます」と、丁は答えた。

「それでは先夫の墓^{あば}を発^{あば}いて調べさせるから、そう思え」

姚は役人に命じて、韓氏が先夫の棺を開いてあらためさせると、その死骸の頭にも釘が打ち込んであつた。かれもかつて夫を殺した経験をもっていたのである。丁は恐懼きょうくのあまりに病いを獲えて死んだ。

時の人は姚の明察に服して、包孝肅ほうこうしゆくの再来と称した。

（包孝肅は宋時代の明判官めいはんがんで、わが国の大岡越前守ともいうべき人である）。

鬼の贓品

陝西せんせいのある村に老女が住んでいた。そこへ道士どうしのような人が

来て、毎日かならず食を乞うと、老女もかならず快くあたえていた。すると、ある日のこと、かの道士が突然にたずねた。

「ここの家^{うち}に妖怪の祟りはないか」

老女はあると答えると、それではおれが攘^{はら}つてやろうといって、道士は囊^{ふくろ}のなかから一枚のお符^{ふだ}を取り出して火に焚^やくと、やがてどこかで落雷でもしたような響きがきこえた。

「これで妖怪は退治した」と、彼は言った。「しかしその一つを逃がしてしまった。これから二十年の後に、お前の家にもう一度禍いがおこる筈だから、そのときにはこれを焚け」

かれは一つの鉄の筒^{ふだ}をわたして立ち去った。それから歳月が過ぎるうちに、老女の娘はだんだん生長して、ここらでは珍しいほ

どの美人となつた。ある日、大王と称する者が大勢の供を連れて来て、老女の家^に宿つた。

「おまえの家には曾^{かつ}て異人から授かつた鉄簡があるそうだが、見せてくれ」と、大王は言つた。

これまでも老女の話^を聞いて、その鉄簡をみせてくれという者がしばしばあるので、彼女は^{にせもの}贋物を人に貸すことにして、本物は常に自分の腰に着けていた。きょうもその贋物の方を差し出すと、大王はそれを取り上げたままで返さないばかりか、この家には娘がある筈だから、ここへ呼び出して酒の酌をさせると言つた。娘はあいにくに病気で臥^ふせつて居りますと断わつても、王は肯^きかない。どうしてもおれの前へ連れて来いとおどしつけて、

果ては手籠^{てご}めの乱暴にも及びそうな権幕になつて来た。

老女はふと考え付いた。この大王などというのはどこの人間だか判らない。かの道士は二十年後に禍いがあるといったが、その年数もちょうど符合するから、大事の鉄簡を用いるのは今この時であろうと思つたので、腰につけている本物の鉄簡をそつと取つて、竈^{かまど}の下の火に投げ込むと、たちまちに雷^{らい}はとどろき、電光はほとばしつて、火と烟りが部屋じゆうにみなぎつた。

しばらくして、火も消え、烟りも鎮まると、そこには数十匹の猿が撃ち殺されていた。そのなかで最も大きいのがかの大王で、先年逃げ去つたものであるらしい。かれらのたずさえて来た諸道具はみなほんとうの金銀宝玉を用いたものであるので、老女はそ

れを官に訴え出ると、それらは一種の贓品ぞうひんと見なして官庫に没収された。

泰不華たいふか元帥げんすいはその当時西台せいたいの御史ぎよしであつたので、その事件の記録に朱書きをして、「鬼贓」としるした。鬼の贓品という意である。

一寸法師

元の至元年間げんの或る夜である。一人の盜賊が浙省の丞相府じょうしょうふに忍び込んだ。

月のうす明るい夜で、丞相が紗しゃの帷とばりのうちから透かしてみると、

賊は身のたけ七尺余りの大男で、関羽かんうのような美しい長い髯ひげを生やしていた。侍姫じきのひとりもそれを見て、思わず声を立てると、丞相は制した。

「ここは丞相の府だ。賊などが無暗にはいつて来る筈がない」

みだりに騒ぎ立てて怪我人でもこしらえてはならないという遠慮から、丞相は彼女を制したのである。賊はそのひまに、そこらにある金銀珠玉の諸道具を片端から盗んで逃げ去った。前にいう通り、その賊の人相風俗は大抵判っているのです、丞相は官兵に命じてすぐにその捜査に取りかからせ、省城の諸門を閉じて詮議したが、遂にそのゆくえが知れずに終った。

その翌年になって、賊は紹興しょうこう地方で捕われて、逐一ちくいちその

罪状を自白したが、かれは案外の小男であつた。彼は当夜の顛末についてこう語つた。

「最初に城内に入り込みまして、丞相府の東の方に宿を仮りていました。その晩は非常に酔つて歸つて来て、前後不覚のていで門の外に倒れているのを、宿の主人が見つけて介抱して、ともかくも二階へ連れ込まれましたが、寢床へはいると無暗に嘔はきました。それから夜の更けるのを待つて、二階の窓からそつと抜け出して、檐のきづたいに丞相の府内へ忍び込みましたが、その時には俳優が舞台で用いる付け髯を顔いっぱいにつけて、二尺あまりの高い木履ぼくりを穿はいていました。そうして、品物をぬすみ出すと、それを近所の塔の上に隠して置いて、ふたたび自分の宿へ戻つて寝ていると、

夜の明けた頃に官兵が捜査に来ました。しかし、わたくしが昨夜泥酔して帰ったことは宿の主人も知っていますし、第一わたくしは一寸法師といつても好いほどに背が低い上に、髯などはちつとも生やしていないで、人相書とは全く違っているものですから、官兵は碌々に取調べもしないで立ち去ってしまったのです。それから五、六日経って、詮議もよほどゆるんだ頃に、塔の上からかの品々を持ち出しました」

蜚語を解する猴

これは杜彦明とげんめいという俳優の話である。

杜が江西地方からかえつて韶州しやうしゅうに来て、旅宿こうりに行李をおろ

すと、その宿には先客として貴公子然たる青年が泊まつていた。

かれは刺繡ぬいのある美しい衣服を着て、玉を飾りにした帽をかぶつ

ていたが、ただその穿き物だけが卑しい皮履かわぐつであるので、杜も

すこしく不審に思ったが、一夕自分の室へやへ招待して酒をすすめる

と、貴公子の方でもその返礼として杜を招いて饗応した。

招かれて、その室へ行つてみると、柱に一匹の小さい猴さるがつな

がれていて、見るから小ざかしげに立ち廻っていた。貴公子はや

がてその綱を解いて放すと、猴はよく人に馴れていて、巧みに酒

席のあいだを周旋し、主人が蜚語で何か命令すると、一々聞き分

けて働くのである。杜もおどろいてその子細を訊くと、貴公子は

笑いながら説明した。

「実はわたしの家の侍女こしもとが子を生ままして、その子はひと月ばかりで死にました。そのときにこの小猴も丁度生まれましたが、親猴を獺かりいぬ犬に噛み殺されてしまったので、夜も昼も母を慕って啼き叫んでいるのが何分にも可哀そうでしたから、侍女に言いつけて育て上げさせました。人間の乳を飲んで育ったせいかな、人にもよく馴れ、また自然に蛮語をおぼえて、こうしてわたしの用を達してくれるのです」

成程そうかと、杜も思った。彼は間もなくかの貴公子に別れ、清州せいしゅうへ行つて呉ごという役人の家に足をとどめていると、ある日、ひとりの旅人が一匹の猴を連れて城内に入り込んだという報告が

あつた。

「それは世間に名の高い大泥坊だ」と、呉は言つた。「まず何げなく、人の家を訪問して、家内の勝手を見さだめて置いて、夜になつてから其の猴を放して盗みを働かせるのだ。大方おれの所へも来るだろうから、その猴めを奪い取つて、世間のために害を除かなければならない」

翌日になると、果たして呉に面会を求めに來た者がある。杜がそつと隙き見をすると、彼はまさしく先日の貴公子で、きようも猴を連れていた。呉は面会して、かれと一緒に飯を食つて、その席上でかの猴を貰いたいと言ひ出すと、彼も初めは堅く拒こばんだ。「呉くれるのが嫌ならば、ここでその猴の首を斬つてみせろ」と、

呉は言つた。

呉は同知どうちという官職を帯びて、大いに勢力を有しているので、彼も強しいて争うわけにも行かなくなつたと見えて、結局渋々ながらその猴を呉に譲ることになつた。呉は謝礼として白金十両を贈つた。

貴公子は帰るときに猴にむかつて、なにか蜚語で言い聞かせて立ち去つた。彼はそこに蜚語の通訳が聞いていることを知らなかつたのである。通訳は呉に訴えた。

「あいつは猴にむかつて斯こう言い聞かせたのです。お前は当分飲まず食わずにいろ。そうすればきつと縄を解いて放すに相違ない。おれは十里さきの小さい寺にかくれて待つているから、すぐにそ

こへ逃げて来いと……」

そこで念のために果物や水をあたえようと、猴は決して口にしないのである。さらに人をつかわして窺わせると、果たしてその主人もまだ立ち去らないで、そこらに徘徊していることが判ったので、呉はすぐにその猴を撃ち殺させた。

陰徳延寿

むかし真州しんしゅうの大商人おおあきんどが商売物を船に積んで、杭州へ行つた。時に鬼眼きがんという術士があつて、その店を州の役所の前に開いていたが、その占いがみな適中するというので、その店の前には大勢

の人があつまっていた。商人もその店先に坐を占めると、鬼眼はすぐに言った。

「あなたは大金持だが、惜しいことにはこの中秋の前後三日のうちに寿命が終る」

それを聞いて、商人はひどくおそれた。その以来、なるべく船路を警戒して進んでゆくと、八月のはじめに船は揚子江にかかった。見ると、ひとりの女が岸に立つて泣いているのである。呼びとめて子細を訊くと、女は涙ながらに答えた。

「わたくしの夫は小こあきな商いをしている者で、錢五十緡ぜにびんを元手にして鴨や鶯鳥を買い込み、それを舟に積んで売りあるいて、帰つて来るとその元手だけをわたくしに渡して、残りの儲けで米を買つ

たり酒を買ったりすることになって居ります。きょうもその錢を渡されましたのを、わたくしが粗相で落してしましまして、どうすることも出来ません。夫は氣の短い人間ですから、腹立ちまぎれに撲ぶち殺されるかも知れません。それを思うと、いつそ身を投げて死んだ方が優ましでございます」

「人間はいろいろだ」と、商人は嘆息した。「わたしも実は壽命が尽きかかっているのです、もし金で助かるものならば、金銀を山に積んでも厭いとわないと思つてゐるのに、ここには又わずかの金にかえて壽命を縮めようとしてゐる人もある。決して心配しなさるな。そのくらいの錢はわたしがどうにもして上げる」

彼は百緡の錢をあたえると、女は幾たびか拝謝して立ち去った。

商人はそれから家へ歸つて、両親や親戚友人にも鬼眼が予言のことを打ち明け、万事を処理しておもむろに死期を待っていたが、その期日を過ぎて、彼の身になんの異状もなかった。

その翌年、ふたたび杭州へ行つて、去年の岸に船を泊めると、かの女が赤児を抱いて礼を言いに来た。彼女はそれから五日の後に赤児を生み落して、母も子もつつがなく暮らしているというのであつた。それからまた、かの鬼眼のところへゆくと、彼は商人の顔をみて不思議そうに言つた。

「あなたはまだ生きてゐるのか」

彼は更にその顔をながめて笑い出した。

「これは陰徳の致すところで、あなたは人間ふたりの命を助けた

ことがあるでしょう」

金の篋

木八刺^{ぼくはつら}は西域の人で、字^{あざな}は西瑛^{せいえい}、その軀幹^{からだ}が大きいので、長西瑛と綽名^{あだな}されていた。

彼はある日、その妻と共に食事をしていると、あたかも来客がある^とと報じて来たので、小さい金の篋^{へら}を肉へ突き刺したままで客間へ出て行つた。妻も続いてそこを起^たつた。

客が帰つたあとで、さて引つ返してみると、かの金の篋が見えないのである。ほかに誰もいなかったのであるから、その疑いは

給仕の若い下女にかかった。下女はあくまでも知らないと言い張るので、彼は腹立ちまぎれに折檻して、遂に彼女を責め殺してしまった。

それから一年あまりの後、職人を呼んで家根やねのつくろいをさせると、瓦のあいだから何か堅い物が地に落ちた。よく見ると、それは曩やむぎに紛失したかの篋であつた。つづいて枯らひかびた骨があらわれた。それに因つて察すると、猫が人のいない隙をみて、篋と共にその肉をくわえて行つたものらしい。下女も不幸にしてそれを知らなかつたのである。世にはこういう案外の出来事もしばしばあるから、誰もみな注意しなければならない。

生き物使い

わたしが杭州にある時、いろいろの生き物を使うのを見た。

七匹の亀を飼っている者がある。その大小は一等より七等に至る。かれらを几つくえの上に置いて、合図の太鼓を打つと、第一の大きい亀が這い出して来て、まんなかに身を伏せる。次に第二の亀が這い出して、その背に登る。それから順々に這い登って、第七の最も小さい亀は第六の甲の上に逆立ちをする。全体の形はさながら小さい塔の如く、これを烏亀うきじょうとう置塔と名づける。

また、蝦蟆がま九匹を養っている者がある。席ちゆうに土をうずたかく盛りあげて、最も大きい蝦蟆がその上に坐っていると、他の

小さい蝦蟆が左右に四匹ずつ向い合つて列ぶ。やがて大きいのがひと声鳴くと、他の八匹もひと声鳴く。大きいのが幾たびか鳴けば、他も幾たびか鳴く。最後に八匹が順々に進み出て、大きいのにむかつて頭を下げてひと声、さながら礼をなすが如くにして退く。これを名づけて蝦蟆がませつぼう説法という。

松しょうこう江えへ行つて、道士の太古庵たいこあんに仮寓かぐうしていた。その時に

見たのは、鰕かじかを切るの術である。一尾は黒く、一尾は黄いろい鰕を取つて、磨ぎすましたる刃物に何かの薬を塗つて、胴切りにして互い違いに継ぎ合わせると、いずれも半身は黒く、半身は黄いろく、首尾その色ことを異にした二匹の魚は、もとの如くに水中を泳ぎ廻つていた。

土地の人、衛^え立^{いり}中^{つちゆう}というのがその魚を鉢に飼って置くと、半月の後にみな死んだ。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

輟耕録

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>